

和書部

和書門		類	
四	三	五	六
二	一	九	函
冊	架	冊	架

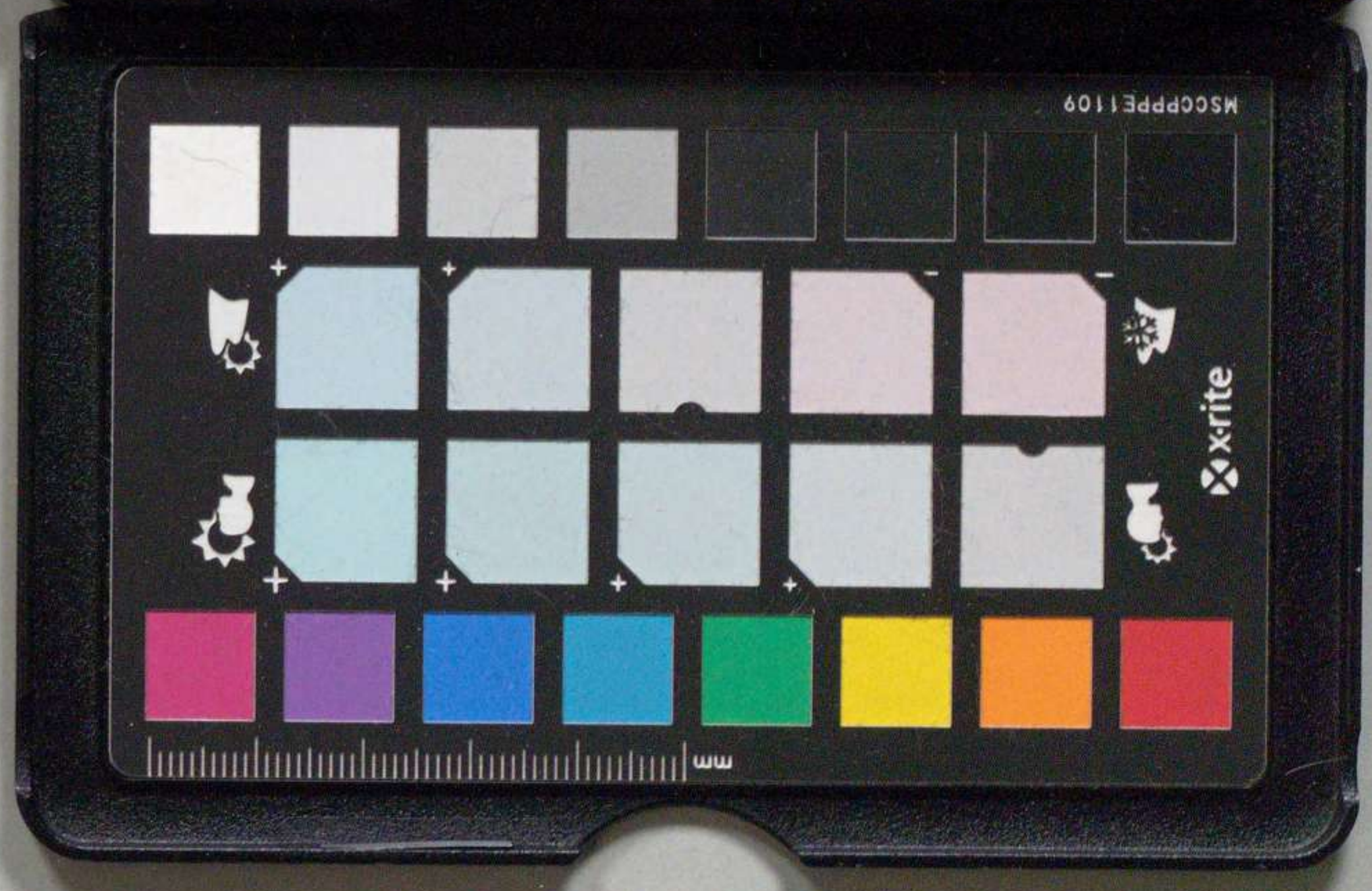
278

和書		類	
四	三	五	六
二	一	九	函
冊	架	冊	架

476

內閣文庫	
番號	和 43562
冊數	1 (1)
函號	166 476

166-476



花巻景都咄巻中



一頃日或人の新又平安城此都ハ今年まぞ既又千尋又

みけろとあん是ふらそ 上様も誠り御信

ふり大掌會たごと御執行ありしに也わは曆數

れ充るを後ひ察らせあふらと実小さらるあとも

りりあんと年代略記を考ふ相武天皇延曆十三

年平安定都とあるせし所より今又天明八年ま

でと算へんれば支干九百九十五年よあはるはらさな

千尋といふべし曆代代所舊記あどあく委しくさく

下出巻中

らば十百ほよほるるも。つりぬべし。治世安民此
 所惠ふり天下此災を京地よはぐめあひ難苦を
 万民とぞとふうけあふとたりへ飲食腹アリもち
 寒さふ襖をかさぬる我軍りつとありとやい
 見え怨きありとやい見え

一諸所焼失れ時刻をたすまりたよあつと実や火
 感陽を焼し三月餘もとだぬと古と書あも記
 したまは此度の火とよも徳取及び大社大寺
 たどと焼るふ三町とに町もかぶるべけはばあるがら

- 一 小町刻とさしかたけきと只その概を記とれ
- 一 正月晦日の曉知れ上刻洛東團栗の通りより出火
- 一 石垣町川端に条下二町目より五条橋通まで五町
 ちまうりれ間忽焼廣がる風ハ寅卯の方より吹く
- 一 月中刻風辰巳の方より吹く寺町永養寺へとひ火
 移る是洛中へ焼入し始めあり
- 一 日下刻菽の下通りと西へ焼佛光寺所門跡へ火
 移りさつ通り四条までとの間焼廣がる
- 一 日辰の上刻因幡薬師菅大臣の社等焼る

一月中刻六角堂及びひ色諸所焼廣がは

一月下刻堀川色より壬生の野まで焼ぬける

一月已上刻三条通まで焼廣がり下みくハ五条通れ

中程高倉烏丸の東西と南れ方風上一焼ゆく火

後東本願寺の方所を通と七条のさうみ根敷所敷れ際より下

寺町及び所敷寺の方と東ゆへけ出ふ条寺町本在町川原所

一月中刻下刻の間中京ゆく三条通れ東西諸所

焼廣がは

一月午れ上刻東本願寺の沖前通門前焼る所門跡

の火消役人たさふ防さ働くとつども都てこの色れ

町家井内へ諸道具と投入しゆへ水一滴もあ

らゆれゆる常ふ公は有べしさ色も多人敷

とりのて瀦々寺内へ防さゆりあり下れ殊敷や

所焼のより根敷所敷たは危く是より火東へ焼

免がは

一月中刻五条色柳の馬場より東れ方所新堂れ

方へをけゆく

一月下刻三条通の西れ方焼る焼廣がりそれより

赤川巻中

神泉苑それ色の所を焚へ此後子

一 日未の上刻寺町より日条より北へ焼のりて誓

願寺れ境内南乃方れ寺中方まで焼うせ寺町

此より一なは所て焼止まる誓願寺本堂

より北のこは

一 日中刻西れ方所を焚方及び此色諸所へ火移る

一 日下刻所緒町本を岡川原所を日条より北の方へ

焼ゆく西れ方より一なは所を焚へ火移る日

分と通よりや所の色へ焼ゆれ二条れ西野中本を

所の小家八九軒ありてこのうは焼うせぬは時

五条大橋焼る

一 日申の上刻雨より出り南風をげりて諸所れ火

勢よりとくさのんかり本因寺へ北の方より火移り

寺内と南へ焼廣がり西本願寺れ鼓樓へ火うはる

御門焼失れ此火風上炎よりて段々東南へ焼廣がる

一 日中刻上京新町よりより千本通を限り西陳を

北へ焼廣がる但し千本通

不出巻中

一 同下刻出水通西の行はめ七本松通りて寺九ヶ寺あける
 北の方ハ紫野今宮所旅まで焼ぬけたりは時風よやく
 止む方ふちりく火勢おころく寺これ子鐘追くつさ
 やまてかーハお音志のりたりたりつくのぶくちりさ
 禁庭れ所方まあくはりまさんんん中ちりる是と
 おろそ京都れ内七歩をありれ焼失ありとや
 一 同著方西の上刻西山の方よ墨を流でるがぶく黒
 雲起り乾の方より大風俄よ吹起り雨志死さ
 降火勢大よ小燧ん小東南北方へ吹立る程し所所

此方忽ち危しは時所公郷方おのく所立退後さふ
 風雨殊小烈し
 一 同夜成の刻所築地の北れ方道正菴のあよりより
 公家所を補へ火迫付く火消大名とくく此色り
 子目けしそ身命を限りて火を防ぐは時同を町へ
 火移り二町斗焼る
 一 同亥の刻公家所を補諸く小火うけらとくとも防ご
 けくく志ざりけ所よさく由叔誓願寺ハ先刻未れ
 刻寺中方限り小焼とまりしが焼とされの老ども夥し

三ノ上ノ上ノ上

三ノ上ノ上ノ上

く本堂の内又ハ縁れあさなむと風雨と志のたつる
 内は時刻よきくれりひびあく西の方より車輪れ
 おとれ飛火三ツ口投けけるごとく来るそんが忽ち
 燃上り暫耐小焼失を是ふらうと怪我人等ぬいと
 あん

一日子の^上刻北^北方鞍馬口の方へ焼ぬける

一日中刻東^東に^東野寺のらく防^防ぐと^東との^東は時刻^刻ふ^東て
 終^終り^東裏通り^裏新町の方より^東所^所基^基所へ^東火^火移^移つ^東と^東是^是より
 御^御殿^殿本^本堂^堂阿^阿弥^弥陀^陀堂^堂大^大門^門より^東諸^諸堂^堂へ^東火^火移^移り^東屯^屯寅^寅れ

刻の間は悉く焼失と

一日下刻公家^公所^所を^公補^補ぬ^公く^公焼^焼失^失と

一日^上世^世の上^上刻^刻上^上京^京寺^寺町^町れ^上り^上り^上り^上本^本屋^屋町^町の方^方と^上南^南

へ^上の^上下^下刻^刻所^所靈^靈の^上社^社一^上条^条華^華堂^堂より^上火^火移^移る

一日中刻^中所^所色^色の^中く^中び^中焼^焼ふ^中は^中時^時あり^中し

一日下刻^下上^上京^京より^下諸^諸所^所焼^焼め^下ぐ^下り^下本^本屋^屋町^町三^三条^条下^下ル^下町

松^松平^平土^土佐^佐守^守殿^殿所^所を^松受^受れ^松際^際より^松焼^焼止^止ふ^松是^是洛^洛中^中に^松焼^焼

とまりたり

一日^上曉^曉寅^寅の上^上刻^刻洛^洛東^東頂^頂妙^妙寺^寺新^新地^地へ^上火^火飛^飛り^上ほ^上り^上二^二条

印出巻中

新地あらちの方町かたまち家やも焼や廣ひろが家や

月中げつ刻くわく下げ刻くわくふあり火ひ洛らく中ちゆう洛らく介けいよ充ちゆう満まん一いつ月げつ火ひ

のて立た昇のぼりの方かたちちり

一いつ月げつ二に月げつ朔しやく日にち卯うのろ一いつ天てん小せう諸しよ所しよ一いつ面めん焼や萌もれて下げ火ひ

とあるその刻くわくより風かぜも少せうしの静しずまりし

一いつ月げつ辰しん己ぎの刻くわくよあて頂てう妙めう寺じ及およびは志し新あらち地ち二に条じょう新あらち

地ち町まち々々悉しつく焼やはく一いつ東とう北ほく方かた寺じ院いんの陰にて焼や止とま

一いつ南なんの方かた入い壇だん王わう法ぽう輪りん寺じはは町まちづらり北の方かた町まち家やよく焼やせらるる

一いつ月げつ午ごの刻くわく洛らく中ちゆう洛らく介けいもも大だい方かた消しょう火ひしては火ひの入

つらるる去こ屋や街まち築つく地ちをと退ひくく焼出でてあかしこと又また

出で火ひと

一いつ月げつ二に日にちああははれれめめ晴はる余をを中ちゆう小せう日にち輪りんををと

見みる見女によ此こ軍ぐん光くわうりおあありと大だいははままのしりもくくり

かかりかり日れれ申まをの刻ををふふりりくくの半ももいい

くく騒さう動どうととれれ正せいしく盗賊ぞくのしららせせるる虚こゝろ言ごん

ありありととりりや

一いつ月げつ三さん日にち四し日にちのしららもも火ひれれ入いるる去こ屋や法ぽう々々焼や出でと

と

と

一 月五日六日小ありて修繕漸く清うせぬ
 一 さまじく大社大伽藍及び惣として大衆は驚き音
 山岳も震働し天柱も折け地軸と折るるか
 おりふらりすさまじくさい見方あり御築地
 などの厚サ六尺有餘の土を流らぬ見事な
 扱本あど悉く焼はじく去中と之ものり
 たるりのありいんや町家焼はじく見ん
 只瓦礫のころぐりさく沙まうる番町京中小婦人
 女ありといふ松方も背ぶさるふみ又ハ猫鼠を介

虫類の生ものあり空と飛諸多ふふも
 眼よさるるりのたりとも南ハ七条通
 屋敷出で七条 北ハ此系野鞍馬口の聖印まで西ハ千本
 小例れ真町を 但一ニ条より水の方までハ中々通
 通 までハ焼ぬけむらや色の真町限り とうざり東ハ加茂
 川の東あまで只曠々として眼れかざるおは
 海より小怪異の火々小し
 一 焼失の町救救大凡つところよりはせせてたよ
 記る

焼失町救

凡三子百餘町

御宇記

八

者 嘯 禮 時

同家数 九十八万二千三百余軒

同寺数 九百二十八ヶ寺餘

内 二百一ヶ寺ハ本寺
七百八ヶ寺ハ末寺

同塔数 九七ツ
本寺 本寺 妙見寺
妙蓮寺 妙見寺 相承寺
誓教寺

同 所所様 公森方 九三百六十ヶ寺を交のう

或人ハを交と算へくいまけを交れ地と町

幡三間づふして六町を二里として九路程

百五十五里餘ありといふ

同焼地蓋数 九万八千三百餘

内 八千六百餘焼失と
二千二百餘焼る

同怪我人 一とあり

太んぬゆりやどりるべいと

一又焼沙王なる寺社方れ分

公郷方 武家方ハ略之

○相承寺の本堂 浴堂裏門

但一塔及九ヶ寺の内
あかこ七ヶ寺のこ所

○上の所霊れ社

柳新巻中

地

お坐省難と評志めしとをりしふりて
未日目のとらたづるよ万物價を減して平生の
とくありし金く中仁政正し死よるまでと
省難も亦くもわづたりぬ

○正月片月番の火清役丹波菟山丸城自青山下
野守敷也其外城別渡江及膳和丹別菟山松別
高槻和丹郡山等進と弛せるとありき多々勤切あり

とくや
○燒後芝居へ勿論それほつ裁師畫くいはく系

○記々ん暫し一ハ京師と寂寥たアしがいまごやど
ちく旧条東の芝居少て竹中儀志まが人ごやう
芝居を始しよる法而小芝居始り髪長く短そ
表ハが怪はよあるまて本れとくに復せしと
是や大平の傳承あるべし

○今夏六月祇園會神輿洗ひの例はれぬ御紙
行りりしごとを移りものへ出さうしをり

七日十日日神奉例年にかりることありしと
町中朝下れ灯燈へぬく燒失し其上當所の困

竊たられバ大に略して物々を町に焼たすニラニツ
かけしあり七日の祭終山坪のわづらおと山を
ろり七引渡し坪のま所れ會所不焼すおわて
見おせしむ焼失せし山坪も焼たすしうる人形
ちと町々の會所も焼すもさく見おせしむに条河
至れ洞凍るごと例業よかろりてもれさびしくぞ
及くしと我

燒失せ山坪たのど

函谷坪に条河丸あへ入而但し名物明徐徳善此

見送りさお女への焼たすなり

蟠脚山 西洞院に条上元火災此後新不出来せしあり

ト出山 綿少修馬丸あへ入お焼たす

郭巨山 二条西洞院東入口の

船坪 新町に条上元所を焼失せ

菊水坪 室町に条上元町

観音山 新町六角下町

○年頃九条のりみ住居はる未至何某とらわ
りある者あると生得志よめざる男あり

平所

今度之大火を幸れどく喜び穀類價を
 ひさばりの白米纏ふ三合餘をとりつて鳥目
 百文ふくまうり人々を乞ふとていふとを
 めに其を乞ふを改めある日一人の男は
 ました淋めて暮しを求めんとしめり
 其高價を乞ひて来た地の人れ難儀を顧
 見たまるとしていふめはとていふとを
 も聞入むこの男涙をなげきていふが
 又明日来るまで泣く是とんとはいふ

主人いよく承引せぬ油目と暮して益
 此言葉と吐く外不安さ米はば求免
 うをきよくと大は悪言はは人のいよく詞を
 いんごんあしてかけらばあさり外に米を
 したる價高くとも貴店れ外求むべき
 所あり一室とりつてあく年したまひて
 相應れ價を取たまると上天福と貴家
 小降く玉の産れをさうはぐよかこら
 いふむ主人大よいらの油益之長言高

家と坊ぐめつと物見せんと首よりと
 佐かんぞひまんと此のつれ彼の男を
 小怒と彼米を引はかんで二三間投付る
 其時始終と見居たる人と物も氣味より
 ヶ拾れ少くさん入のれは万人の見せ
 免より悪き米やうまそとさんぐと打
 たよりうまの米よりぞ育いと彼米
 登はさんぐと小投打まを人米もなうり
 が漸か付る後ハ先米とらひ物の價が
 下りかべ人と當所の難儀とのがはは米や
 と投一人のさそく益人強そ人と
 よろこびひらふとぞ

○二月朔日頃の事かよよ人と住居と米
 泥ろと赤柳あてさまのひける折節
 草鞋とまのをれりつ足のあはみ
 六十又ありといふ人と其高價ととがむ
 海くくものせられ直段もまけのどといふ

一人は男は湯ふきの高き草鞋の
 ちよりのうま去ふた能やわん某じ
 は百足討と跡は買とるしと荷ひ
 取れもいとわひ扱ぐいふふ色とを
 故さ人々はにありらぬ商人打よ相
 けのこひめく内は草鞋者ひ人
 荷もつと控とあも逢先と行方を
 志はひか男は草鞋と多くとりれ
 人こふ分あつて人をたつたつたも

○燒地は内十分燒ゆたなりひし本
 街甲しつるぬし又寺社方堂上
 火中よ街の西へるをあり花山院殿
 廣幡殿及び其外七八ヶ所残りあり
 去依る處補たぐとのをたたり風れ
 吹廻しれ合あやりの人のいふあま
 風強くして吹切らぬといふを信あり
 是を多ふり守又土佐守殿を安花山

都察院中

十四

院殿をどく往古よりを梳とらみて火災と
 守るといふ今度れは火人力の及ぶ所
 所彼が通カゆく防ぎ止めしは実奇
 めれ事ありと感ぶる人もあり又傍
 よのりよ其梳を及れ汝汰ゆののじ
 狐福茂勸請でし御を浦方小焼え失せ
 一方まゝあり又今度火災茂逃を
 委委悉く梳を及れあはれ驚れ
 通カゆく災とぬまき西よといふごと
 した

ある時ハ八百方御神日夜守獲り
 禁庭ハ何の巻上り申しハ八百方御
 此御カまじりひふ及ぬばざりな程火消
 上り此梳ちり六月裏ゆり又是伺て
 よぬ事あり又花山殿土佐屋敷ちごと
 と守りこつ糸己ま左程の通カゆれば
 日本國れ着属悉くかり集免禁庭とを
 ど救ひ奉らざりし普天の下卒去れ内
 王地ありざる所たりしむのがりた畜はる

と夢を枕んとすもよと例しりぢうとさ
 一是ささりて人たれが畜生れ儀す
 けいむと換抄とやかく庚申侍の夜も已
 小三更もとさだめ

○方廣寺 則大 弘願 此境内裏借女小年頃世を

細く住あし人又雇られく日成送る男あ
 さいけを未ぬよりの起く飯をかした年
 かの洞て夜れめると依く雇ひある主顧
 此方小あり依ますあく勤め働さける變扑

此男あく有るあがな頼寺の浪士上回何
 某此方又目と出入りけるが正月晦日此曉
 例のどく彼方へ行んとあく起るあがあ
 まり風烈補凄涼うをけりまこばいけをよ
 里とく起く表ふと立出あれりたを起
 見えり者たあしに合傷なれ男一人を
 も大風小眠とら免て目あ表あよ立出く
 ぬ人ささり物ぢりりして居けりうち
 清水れあさるもねがりささり酒の炭

ふりこめてとろとろと流りしが火もサたみれ
 ぬと火もとれ飛出るとる内ま一文
 と飛くは桑河東れ方ふ落り怪しと
 えや内は火二抱れ柱のどくはと
 まく字留ふ登る神凡に又百丈その
 勢天をばけらぬとて人へ一ぐ上るも
 どんぐみまけて足内ゆあくは流る
 うせぬはあ人一身毛立て怒らしと思ふ
 移は是れまどとて人へと顔色されど

内は趣入りまそとろも夜れゆかて夜
 具打りげたおもいふ念佛して居る
 一が替くあそ表れかこは高高く火事
 あつとまよるお我この大風小いうあふ
 者う火とあわまてるぢと立出んまバ
 先さふ火の立昇りまつりあつぢぢ
 し世ふいふ火柱つもの育とてぢぢ
 がさるるまやふたんとこれ男上回氏
 ね詰りく語りしとあや

都野草

七

一今度火中よて焼死横死せしむれども
 死骸れ有而上糸れ分ハ二条川系小じ
 中系ある分ハ二条川系に出く下系あ
 分ハ松原れ川系よ持出さそ也所録れもの
 尋来ると傳くそを後させむふされど
 も救日の後けわよ宿志をさざる死骸
 於よ焚八百余ふ及ぶものく東山南無
 地藏れ穴小葬るといふもぬれ死穴
 成埋みくち成堆く積守のたきやも

いまご十分れ一ふも及び是小信く公れ
 命と蒙り二条通かみや川の面穴と
 三ツ堀らせそは内小葬じしめ無縁
 引導れ免塔を建て後世にたはけむ
 其後三月廿四日あり日毎るものそ花頂山
 智恩院よあて山下れ僧尼悉く集り
 大法會を執りさせたす小方丈に
 導師よさそせむひま運引接れ念誦を
 ばまぐり一急終多れ声れららふ

撰取れ光明何ま秘く十方世衆とて
て火災諸難れ亡者なりもさうあり
本國土悉皆成佛うごがりおもをたう
そんのかくて一七日法會満座して願
くは功徳とりひく平等一切不施し
トく菩提心と發して安樂國に往生せ
めんと結願れ磬お鳴しあへば聴
賤傳聞れ輩ふるあつちのて随喜れ
涙とわりごころありし所惠あり或人
待ふ

待ふ

長安失火戊申年万戸千門盡作煙

為役道場做薦福靈魂此日應歸天

是やむり養和れ頃五幾年飢て死人
途小満が仁和寺れ降曉法中深く是
を歎さるまは聖とかすひて我れ
死首れんゆはごふ阿字とかすて縁を
むとあむむらとあんやれけりふ系
八中水ハ一条よのを南ハ九条まろて東京極

新撰

三

よるを西来雀までには万三子三百余有る
死人と盡く葬り玉いぬとむうも今も
かまぬ佛門乃廣慈貴むぬ一仰ぐ一し

花紀東都勅中 終

花紀系部漸卷下

一上々様方候の所存所 氏系方候所存所也

畧々右系上の様示出々々々々々畧々

一又後二月と旬建仁寺より日々教石の粥

たせらるる凡一ヶ月候りの所は是を徳小施

ゆふ是は心々飢かつ不養ぐもの供了とり

朱瓜煮々びされ上仁恵され下も又

徳小化一太坂と結辺玉の豪富のもの我も

と施りぬさう一々れは窮人の賜りの巻えお

下出巻下

毎くしに嘗ふ有延た仁意るしとわ
 一これに災後東北の老たるも是をまがれしとく
 親族朋友との不焼失せしむれしとて法
 人にもろく名く松根せしむるも亦ひるる代
 東方をふ拂くし日月の光をたんとるがごとし
 清仁政るれば清交死の清方とくも者く神め
 の宰しとくましくゆむ改道正しく一言世ふ後ふ
 これに犯人と皮のやうまはれし因循の改めし
 清仁にせむ罪の軽重を分ちし理非めししに

仁意然に候くしとれれば東北の老くもはるそ恩は
 かこりしとて當時の延候も老るが如くま外有
 延た清解目く作出されれば名く案城の老ひ
 とふし者延とて本ふ老くぬ又案持の所人等ふ
 他處にゆるるの法禁しあひし又亦普信考へ務む
 此方に建べし抱を安借を所持のものも信や
 抱を安の分ふよく建べしとて又亦普信考へ
 ぐられたりの七老ふしとて一或は道があらひ乃
 小なるも又老のらひ亦普信考へしとて一又

仲るるものごとく津免作付を乞ふる者も農業者
と考へにまぐと成る程に上意あり大工日雇
とも賃銀平日の通より高き銀を乞ふにせよ
しんち中後より若くは銀を乞ふ者も所へ出
てしと又徳正材木伐出の後の京都と
つらうた極の勿痛き價に高入やうとせんと
佐知する又米穀成木を介何よりは賞へしめ
き價ふしと一りのの子建所へ出しと又所
のりのはとこの如く上下高利と及びる者も

火災の後の後よりいふ所織袴等も亦たうた
ともいふ所のもの後より高き銀とせよ
よめく人心迷のどくしけ當時今銀も高
うたりののち高きと出し或はあやうた小を
かどと浴ひ家業をたうたわたりは幾小廿余日
なごた子をおを迫の飛拂通海しとく万平平
目も復にされぬとくに普信始り是ふよめく
人心自然と定まり京比大よ群體し非道
の若も徳志し瓜改む命令とせんとお意

一時の焦土とありぬとさればつあるを御小供
 氏の家人ももれ東山寺の精舎に仮居し
 ありしと彼道人のひまのたれが衆人を
 主の衆にあくとさる程に乃人いつくふ火を
 さけあつわと同たれ乃人笑て衆をさるん
 とさく園の東山寺とて教さし一が思ももや
 芳とぬれが昔あつりの野凡のまよ教とさる
 琵琶弾とてあう一ぬらが那立那のまよとさる
 と入洛とてなう一さるは日とて湖中の風を吹

堂一只今ゆりまどりとて焼くもたれ
 とわまの源君子とてりて一とされが昔の名醫
 和氣何茶が麻瓜診とて地衣茶とてり
 先年の焼の光とてく大火の茶とてり
 呆仏老人のありとて斜抱琵琶弾とて一腔高山
 流水意深く怪来餘韻無亮響は夜祝融仇帝郎
 意も又生と華とてく面白く又洛東の御軍塚も
 正月廿九日明動とて是も又神の奇とて愛公示
 一あつりのさる一とされが焼くもりてさる

鐵と化して金と成るは易く人の道心と除
 布と成るは難しとや夏小正の始一と定科
 一のひし方民使樂に誇り永く泰平此厚
 緑と身んどりより驕奢の風五くに増も一綿
 繡を載して衣被を粧ひ珠玉を飾りて家
 室を粧ふ世の成室これごとく泥と成るなり
 ごとくかうしては況んや京師の風俗美多
 ちとて其究る所と志しは族大賈
 へい入もさうり室乏の若尚是ふ然優と

んの瓜保つされは是速多多く明悟の人あり
 浮樸の皮示瓜やごとくはとらへも一濁の
 水瓜はく一車菊の火瓜粧ふごとくも云ふ
 室しく灰塵と成る時より瓜空文今や
 聖君賢佐と成るに誇り一ひ徳の如海瓜
 化し仁恵死骨に及ぶこれだけ友の中も世
 の汚濁瓜一皮一乾坤瓜あつとめ驕奢
 乃浮華瓜拂ひ徳外の風を起しめんと
 有るも目やとく瓜をさめぬ

天明きる... 初春... 後徳名家... 比禱歌人... 捨矣... 未れ其作者... 今抄... 其... 本...

天明きる... 初春... 後徳名家... 比禱歌人... 捨矣... 未れ其作者... 今抄... 其... 本...

洛陽行

舞名氏

戊申正月晦日曉

焼出洛東楯辻子

下出卷六

二

杜頭僅殘蛭子杜
 寺前回祿建仁寺
 青樓簾燃為紅樓
 白人顏燻成黑人
 整々火消行粧者
 忠臣藏之画看帝
 點々鐘鼓音声者
 唐綉帳之急逃行
 焰飛河西支市中
 寺御幸楚屋富揚
 衣新釜及西小川
 越堀河至千本防
 上自一条今出河
 下過五条橋詰塘
 四面八方煙簇々
 千門萬戶炎昭々
 奈良原通為炯通理
 醒井筋何不能渡

染殿地藏地為席
 五条天神天作處
 天神火粉如鋪錦
 藥師燒斃似煮蛸
 東燒西殘本願寺
 上炎下免茶人房
 人丸不止管大臣
 醫王無効因幡堂
 无恙鴛原野中嶋
 右習桶取至失桶
 火花雪散俊成社
 心當夫見夕顏墳
 本國塔婆五層覆
 池坊本堂六角焚
 銅駝坊中萬民驚
 聚樂高趾千軒薰
 行願寺僧皆着革
 道成鈎鐘再成湯

水火相攻水火共責
妙覺角龍吟起雨
戾橋燒落大勢戾
赫々赤者然火燃
抱兒夫婦河原泣
算司長持及鍋釜
往來連綿難押分
伏見男女伏不寢
革靴鳴燭浴中之

今日菴今日燒亡
報息鳴虎嘯助颯
西陳些殘人尽西
皎々白者殘本藏
失親兄弟菜昌狂
弓鎗大小与錢箱
人馬絡繹欲陷鳩
大津老少大斷腸
豆腐葯蕪平安衰

勿憂御藏一不燼
命今物種喰村生
右狂躰為記事錄而已
諸名家詩歌

仁政施行米醇
天命何盡天明春
清人 蘓元端

祝融行令驅風車
災却長安十萬家
諾大詩腸幸不燼
吟遊依舊弄春花
京火記事
草廬
東門災厄及池鱗
宮闕化煙花
作塵應是

何れも君は袖をさへ袖おれて尼とて後には
おれはまゝ

おれはまゝ

高尹

おれはまゝ
おれはまゝ
おれはまゝ

おれはまゝ

一室

おれはまゝ
おれはまゝ
おれはまゝ

おれはまゝ

おれはまゝ
おれはまゝ
おれはまゝ

おれはまゝ

菅店

おれはまゝ
おれはまゝ
おれはまゝ

おれはまゝ

意地

おれはまゝ
おれはまゝ
おれはまゝ

おれはまゝ

